



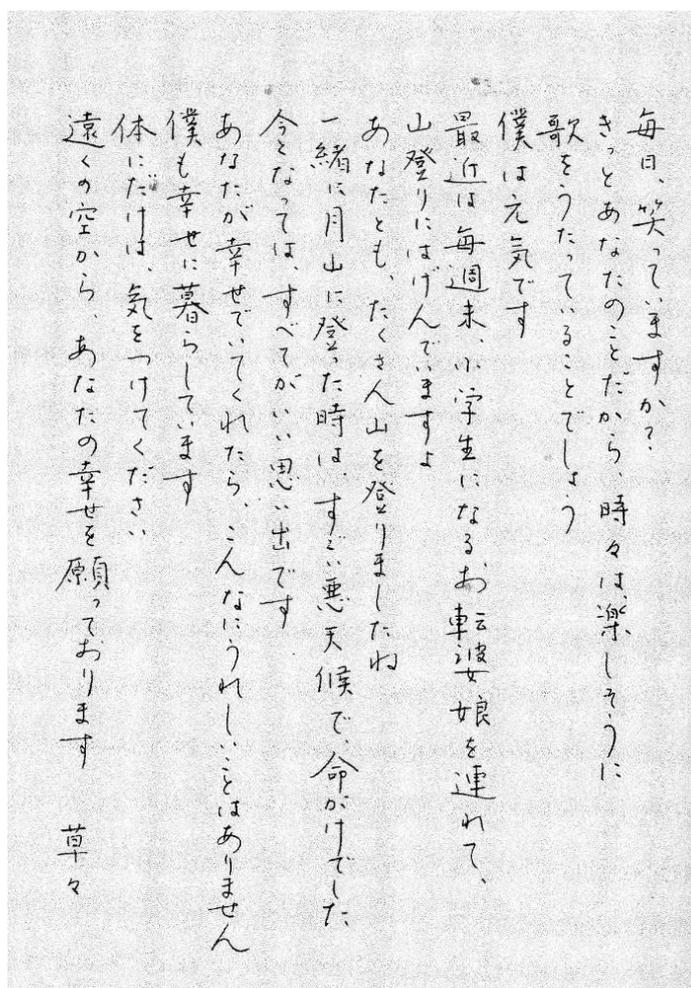
り、鳩子（祖母が鶴岡八幡宮の鳩からとって名づけた、愛称ポッポちゃん）も幼い頃から、祖母に習字を厳しく鍛えられたお蔭で代書業も引き継いでいます。文具店は近くの子供が立ち寄るくらいの小さなお店で、代書業も祝儀袋に名前を書いたり、年賀状の宛名書きをするのがメインで、ひっそりとした暮らしです。しかし時折お客がやってきて思いがけない代書を依頼されることがあります。

全身水玉模様の洋服で包んだ「マダムカルピス」からお悔やみ状の依頼。よくよく聞いてみると、友人が可愛がっていた「権之助」という名の猿が亡くなったことに対してのお悔やみ状とのこと。自分の叔母や可愛がっていた金魚の死で感じた悲しみを思い出して心のこもったお悔やみ状を書きます。マダムカルピスの孫娘・小学生の「こけしちゃん」から先生に出す恋文の依頼、これは慎重に考えて書けずに終わります。結婚して15年の夫婦、妻に親しい人が出来たため離婚することになります。知り合いに離婚を報告すると共に幸せな結婚生活だったことを知らせる夫婦連名での手紙の依頼。鳩子は結婚も離婚も経験はないが、夫婦を温かく見守ってくれた周囲の人に、感謝とお詫び、さらにこれからも応援して欲しい旨の手紙を心を込めて書きます。

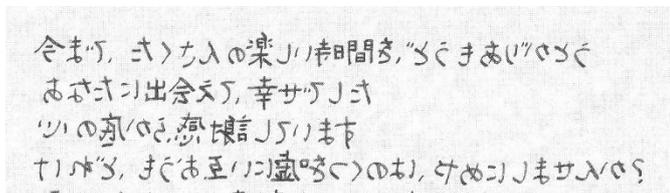
かつて結婚まで約束した幼馴染の女友達が、20年以上たって北国で幸せに暮らしていることを知り、自分が元気だと言伝えたいという手紙。自分で書くには妻に対して後ろめたいので代書を依頼されました。ご主人に疑問を起こさせて、幸せな結婚生活に波風を立てるのは悲しいので、宛名も手紙も女文字で書きます。右がその手紙です。

金の無心をする友人への断固とした拒絶状。とびつきり美人なのに字が汚くて悩んでいた人から義母に宛てた、とびつきり美しい字で誕生日カードを書きます。ずいぶん昔に亡くなった父親からの便りを待つ

認知症の母親へ、父からの偽のラブレターの依頼。ようやく字が書けだした近所



の5歳の女の子との文通、長年付き合っていた友人への絶縁状。これは5歳の子供の左右逆さまの文字にヒントを得て、右のように（一部ですが）鏡文字（裏文字）で書きます。鏡文字で絶縁することになった人への好悪相反する気持ちを表現する巧みな手紙になっています。



続けて和装美人がやってきて、またしても絶縁状を依頼されます。長く指導してもらっているお茶の先生から、本人や家族に対しての悪口がひどくなり、身の危険を感じるようになったので縁を切りたいという依頼です。話していると依頼人は小学校時代に何度か助けてもらった同級生だったことが分かります。友達のきっぱりとした気持ち表現するため、絶縁状は毛筆で漆黒の文字にします。

最後に祖母から友人に宛てた手紙が出てきて、厳しかった祖母の苦悩と鳩子への本当の愛情が分かります。鳩子は亡くなった祖母を初めて「おばあちゃん」と呼びかけて、美しい自分の文字で長い別れの手紙を書きます。これらの手紙が依頼人の性別や内容に合わせて、インクや筆、色や字体、便箋や封筒、切手にまでこだわって書かれています。本にはこれらの手紙がそのまま掲載されています。手紙や書が好きな人にとっては見飽きないことでしょう。

鳩子を取り巻く人物も、隣に住むバーバラ夫人（百パーセント日本人だが、海外暮らしが長かったせいか、みんなからこう呼ばれています。若いボーフレンドがいるらしい）、抜群のプロポーションで小学校教師のパンティさん、やがてパンティさんと結婚することになる和装でダンディな「男爵」と呼ばれている男性、お父さんと二人暮らしの5歳の女の子のQPちゃん（ポッポちゃんはやがてここ子の母親になるかも）など多彩な人たちが登場します。この人たちと神社・仏閣やレストランなどを訪ねながら、ゆったりと鎌倉の四季が流れていきます。著者によるとこれらは全て実在するところのようです。鳩子たちは鎌倉駅の裏側のちょっと変わったスターバックス御成町店に立ち寄ります。私もこの店の前を一度通ったことがあります。ここが横山隆一さんの邸宅をそのままの形で使われていることを初めて知りました。

尚、作者の小川糸さんは1973年山形市生まれで、清泉女子大卒業の小説家、作詞家、翻訳家とのことです。

今時こんな代書屋さんが本当にいるのかどうか分かりません。しかし鎌倉には鳩子のような代書屋さんがいて、登場人物のような人達が住んでいる一角があるかも知れません。この本を片手にいつか鎌倉を散歩したいと思います。

以上